

土木系学科の数、生徒数、専門教員数、実習助手数調査

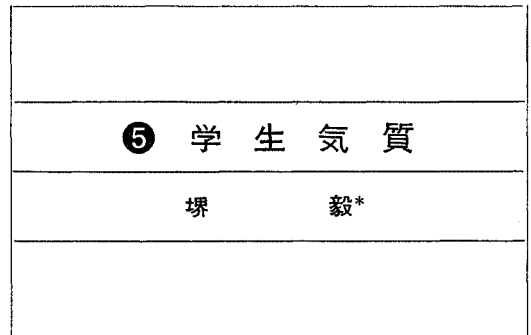
区分	項目 学科名	国 公 立										私 立									
		全 日 制					定 時 制					全 日 制				定 時 制					
		学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習	学科数	生徒数		教専員数門	助実手数習
			男	女				男	女				男	女				男	女		
土 木	土木建設	155	21531	87	771	224	13	1007	41	13	18	3154	1	70	12						
	建設機械	3	542	3	19	4	3	273	4	12	3	822	5	15	4						
	開発機械	1	219		8	3															
	土木建築	1	237		8	2															
	水中土木	1	125		5	4	1	97	4	1	1	397		6	5						
	建設工業	1	244	2	7	2						1	288		4	2					
	工業土木											1	721		11						
	計	162	22898	92	818	239	17	1377	4	57	17	25	5382	6	106	23					

といわれなければならないと思う。

4. 土木科教員の概況

昭和 50 年度末現在、全国で土木科が設置されている数・その在籍生徒数・教員数は上表のとおりである。工業高校の約 1/3 に土木科がおかれており、生徒の数は全工業高校の約 6% 強、専門教諭の数は工業教諭数の 6% 弱である。ざっと 1000 人近くの人が全国の高校で土木専門の教員にあたっているのである。これらの年齢や学歴構成はどうなっているか。適当な統計がないので正確にはいえない。40 代後半より上の方は旧制専門学校卒が圧倒的に多く、旧制大学卒はきわめて少ない。40 代前半以下の方はほとんど新制大学卒であることは論をまたない。50 代の人で学校卒業後すぐに先生になった人は少ないと思う。たいていは終戦直後の混乱期にいろいろの事情で教師に＜デモ＞なろうと思った人が多い。戦後今日までの工業教育はこのような人たちによって推進されてきたといって過言ではない。このことは、工業教育にとって幸いだったと私は思う。昭和 30 年代の高度成長時代に工業高校が増設され、教員の不足が考えられたため、国立大学に教員養成所が設けられた。第 1 回生は昭和 39 年に卒業し現在 33 才くらいである。5 回生まで送り出して廃止になったが、工業教員の若手の中でこの人たちの占める割合がきわめて大きいことに注目すべきである。10~20 年後の工業教育を考えると、この養成所卒の人たちの責任は重いと思う。土木の場合、国公立大学工学部の卒業生で教員になる人がきわめて少ないのも問題点の一つである。認識を新たにしたい。教員を志望してほしい。

このほか、高校教育の現状と教員の意識の問題、研究組織と活動状況など、高校土木科教員にまつわる多くの問題を取り上げたかったが、与えられた紙面もつきたので、このあたりで終わることにしたい。



⑤ 学生気質

塚 毅*

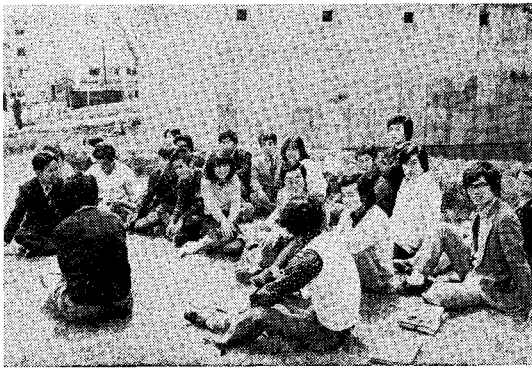
1. 今も変わらぬ青春群像

土木に対する一般の印象は、「自然を相手に闘い、巨大な構造物をつくることに魅力がある」という答は入学試験などの口答試問の際によく聞かれることである。

しかしながら世間一般の風評はどうであろうか。酒や人情にもろいようなイメージだけが強く出されていて、映画などに出てきたのはわずかに「虹にかける橋」「黒部の太陽」など二、三が思い浮かぶ程度で若戸大橋、高速道路なども建築分野の仕事と考えられているくらいの認識であり、一般社会には土木という仕事あまり理解されていないことだけは確かである。

これらを大学と学生についてみると、大学が直面するさまざまな問題の背景には、大学の大量化の影響によるものが大きいと思われる。これに伴って、学生はいかに変わってきたか、高等教育システムの規模の拡大の構造を、① 数量的側面——学生人口、財政、施設、設備の拡大と、② 質的側面——多様化・多元化の現象、高等教育の種別化、学生層の意識変化、管理上の民主化と効率化など、とに見ることができる。そして、④ マンモス化・マスプロ化した教育における学生の不安には、単に少数グループをつくったり、建物や教室の拡充では対

* 正会員 工博 日本大学教授 生産工学部土木工学科



健康な明るいキャンパスとわれらが後輩たち

応できなくなっている状況、⑥ 学生の多層化に対して、その能力や経済力などの単一条件をカバーすることだけでおおい切れなくなっている現状、すなわち学生の生活条件の多様化と、それが充足できない不満が往々にして紛争に発展すること、⑦ この多彩な学生集団に対応するために、カリキュラム改革にしても、教職員の養成にしても、大学の管理運営さえもが、ずれと時間的遅れを免れないことなどが、ここに指摘できよう。

今の学生たちが昔の学生と違うかと問われれば、私は<否>と答える。青年の心情はいつの時代にも本質的には同じであって、それが10年や20年というわずかな年月で変わるわけではないのだ。青年らしい潔癖さ、直情径行、流行に敏感なこと、世の中に無知なるがためのロマンチズム、夢多きがゆえの挫折感などは、昔も今も少しも変わっていない。ちょうど、反響のよい風呂場で歌うとだれでもが自分を美声だと思ひ込むように、10代の少年はだれでもが自分を詩人と思ひ込み、20代の青年はだれでもが自分を小説家と思ひ込む。そんなことは、昔も今もまったく同じである。にもかかわらず、現象的に見れば今の学生には昔と違った面が多々ある。

2. 外国コンプレックスのない世代

Tシャツとジーンズにはじまる服装革命、男だか女だかわからない髪型、キャンパスに不可欠になったタテカン、果てしれぬリンチ事件や内ゲバ等々……、若者たちはいったい何を考えているのだろうか。

まず、戦争に対する決定的な認識の差がある。むしろ彼らも知識として戦争を知っているし、ある者は戦争文学や体験記を熱心に読んだり、またある者は反戦運動を熱心に行っている。しかし、彼らの頭のあるのは自分とはかかわりのない遠い時代のできごとである。例えば、戦争という一言でわれわれは反射的に太平洋戦争を思い起こすが、彼らはベトナム戦争を連想する。日本の国土を荒廃させたかつての戦争よりも、新聞紙上で毎日目に

したベトナムのほうが、はるかに切実で重大な関心事なのだ。

戦争に負けたという根本的な経験がない以上、彼らは戦勝国であるアメリカに対して妙な劣等感を持たない。

だいたい、ものごころのついたのはサンフランシスコ条約以後、いやもっとあと、1960年安保後の日本の経済力が復興したころであるから、アメリカ人に対してなんのひげ目を感じないのは当然だといえよう。その点彼らは驚くほど明るく自信に満ちている。アメリカに劣等感がないだけでなく、総じて外国に対して現代の若者たちはなんの気がねも感じていない。これは、一つには交通機関の発達という物理的状況も関与しているであろう。

とにかく簡単に外国へ行く。学生の身分で海外旅行するなどということは、われわれの学生時代にはまったく考えられない贅沢ごとであったけれども今は違う。夏休みを利用してちょっとヨーロッパ一周なんていうことは今の学生たちにとってそれほど難しいことではない。学生だけの旅行団体やチャーター機を利用する宗教団体の巡礼などに参加して海外へ旅する学生は多いのである。彼らにとって外国旅行はちょっと大きな国内旅行ぐらいの感覚であって特別の行為ではない。外国に行ってもその国の話を聞いても、彼らは別に驚きもしない。これに比べて私たちの世代は敗戦後の物資欠乏時代に、アメリカ人が自家用車や冷蔵庫や洗濯機やクーラーを持っていたことにびっくりしたものだ。そんな経験は今の学生にはない。ないというより彼らには想像もできない。生まれながらにしても彼らの家庭には昔のアメリカ人らが所有していたものが全部備わっていたのだ。外国に行っても日本になくて向こうにある物はまずない。

ヨーロッパや合衆国などが日本と同じような場所に見える彼らには、その他の国々のほうが好奇心の対象になる。

まず、中国、インド、アフリカ、南アメリカなどへの関心は彼らには異常なほど強い。日本を含めた<欧米>にないものを、それらの国々に求めるのだ。こういった関心の方向と、今の若者たちが、日本の古い伝統を振り返りたがる傾向とは、おそらく関係があると思われる。

3. 2つの型に分けられる学生群

現代の学生は大学教育に対して2つの考え方を持つグループに大別されてきていると思われる。これらの教育に対しての変化は、やはり社会の変化と対応しているものと考えられる。そのグループの一つは、少しずつではあるが彼らの大学に対する考え方は、むしろ各科の特色よりも高度な大学教育を受けることを望んできている。それらの理由は大学教育の普遍化と高度に技術化した産

業社会の欲求、また学生の迎合によるものである。これに対して他のグループは、むしろ十数年前の学生の大学に対する考え方を踏襲しているグループである。彼らは、それぞれ希望する専門の学科のプロフェッショナルとなることにより、進歩した社会に対応できるように心掛けている。そこで、多くの専門科目をより密度の高い内容で理解しようとしているグループでもある。前者のグループは、より社会の流行に敏感に対応し、専攻した学問に素直で自己の立場に対し忠実であり、同一グループ内において共同意識を持っており、現代の管理社会においては、一般に望まれるタイプである。後者のグループは、彼らの理念上ある程度の頑固さを持つようであるが、これも学究の徒として当然の一つの形態であると思われる。いずれのグループにせよ、かつて学生が持っていた大学教育に関する考え方よりは、むしろ教育・学問に対して広い許容範囲を持つ学生になってきている。

4. 現代学生気質雑感

今の学生は研究室に入ってくる時、多くの場合2人以上の複数でくる。これらも、ママサン教育のせいかもしれない。

就職についてみると、10年前の学生は、企業規模にとらわれず、学校や先輩の意見を重要視していたし、勤務地についても、どこでも行くという心構えが強かったが、今の学生は企業規模に敏感で、自分の考え方よりも、親の考え方に支配される場合が多くなっている。仕事の内容もさることながら、待遇についての関心が強くなりつつある。

勤務地についても都市部とか自分の出身地域などというように限定して選択しようという傾向がある。不況下においても、それほど焦燥感を抱いていないことも特色である。

アルバイトは昔は主として経済的理由によるものが多く、ある種の羞恥心を持っていたが、今の学生は働こうと思えばいくらでも稼げるものだという安易な気持があって、余暇というより堂々とアルバイトをする。それも知的なアルバイトばかりでなく、激しい肉体的労働もする。そうして捻出したものは、旅行から始まってほとんど遊ぶために使われているようであり、貧困のためのものであるのかどうかよくわからない。今日の学生は学生服を着ていない。これは一定の体制への反逆を意味しているのだろう。また、現代の長髪族は明治の断髪脱刀令の時代の逆の現象であり、新しい世代の学生たちは長髪は大学生のシンボルと心得ているようである。長髪は、現代青年の流行であり、おしゃれであり、それが同時に大

人たちとの違いの表現であると考えているように思われる。ここで、われわれは教育が万能薬でないということを改めて認識する必要がある。教育にすべてを期待する社会はきわめて安易で危険である。大学が本来の教授・研究の目的を離れた小さなことにサービスしすぎる傾向は、十分に反省する必要があると考える。

<h2>⑥ 建設業</h2>
<p>佐藤信三*</p>

1. 吉田先生のこと

「君は僕の講義を聞いていなかったね」と吉田先生の大きな地声が地下コンクリート実験室いっぱいになり響いた。それは昭和22年の春浅き3月初旬であった。当時私は京浜国道の舗装工事に従事し、主として品質ならびに工程管理を委ねられていた。業界に足を踏み入れた最初の現場であった。進駐軍工事と呼ばれ米軍の監督の下に厳しい示方書にしばられたその工程と品質管理は、なみたいていのもではなかった。着工後6か月の大突貫工事が終わりかけていたある日、新設舗装部分をボーリングされることになった。舗装厚のチェックと強度テストのためである。そして数日後、突然米軍からその結果報告を求められた。私はとまどった。何はともあれ大学へ走った。そこで先生の一喝にあったのだ。すぐに闇市に走り一袋の硫黄粉を求めてきたところ、先生自ら白煙立ちこめる中でキャッピングをし、そのテスト表を作成してサインまでして下さったのである。しかも強度不足のピースに対しては、ボーリングの不手際と運搬中云々という註釈をも付けて下さったのである。私はお陰でその職責を全うすることができた。在学中は、大学とはこれほど有難いまた権威のある所とは想像もしていなかったが、私が業界に入るについては、吉田先生のご訓育が大きく影響していたと思う。それは戦火たけなわのある夏の蒸し暑い昼下がりの講義のときであった。そのころ私たちはどんなに暑くても教授の許しを得なければ制服のボタンを外すわけにはゆかなかった。やがて、先生自

*正会員(株)大林組東京本社 土木本部東京営業部営業部長